

**医学部**

I	教育水準	.....	教育 3-2
II	質の向上度	.....	教育 3-5

## I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、教育目標に沿って同学部内に 3 学科を設置している。入学定員、入学者数は医学科 95 名、95 名、栄養学科 50 名、52 名、保健学科 124 名、126 名で、専任教員は医学科 143 名、栄養学科 21 名、保健学科 53 名であり、それぞれ充足された学生数に対し、4.1 対 1（医学科）、10.0 対 1（栄養学科）、10.5 対 1（保健学科）の専任教員と、病院所属教員、学外非常勤、臨床（准）教授等が協力する組織を整備し、相互に兼担する体制が取られているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、各学科とも教務委員会を中心に特定教育観点の部会を設け、平成 14 年に設置された医学部教育支援センターとの協力支援体制、年 1～3 回のファカルティ・ディベロップメント（FD）開催、学生による教員評価、年度別ベストティーチャー選出等を実施し、教育内容・方法の改善を図っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

### 2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、3学科とも2年次までに終了する教養教育（全学共通教育）と early exposure、2年次以降の専門教育（医学科;基礎医学、医学研究実習、系統別臨床専門科目、臨床体験実習及びクラークシップ臨床実習、卒業試験、栄養学科;2年次以降管理栄養士用の専門科目と栄養教諭免許取得用カリキュラム、保健学科;2～3年次の専門科目講義と演習、実習及び臨床実習、4年次卒業研究カリキュラム）を配し、研究及び実地臨床の両者を目指した課程編成を行っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、医学科では学生との懇談会、学生による授業評価、関連病院長との懇談会、関連病院での臨床実習、関連病院の見学・企業訪問による学生や社会からの要請への対応がなされているとの記載であるが、その根拠資料がなく実態が分かりにくい。しかし、自習室の24時間開放、実習の充実（3年次の医学研究実習、5年次の国外実習、地域医療学実習）、学生による授業評価の導入等の改革がされている。栄養学科においては、栄養教諭資格用カリキュラムの導入、人体解剖実習見学、企業・研究所見学が、保健学科においては、3年次編入制度の導入、1年制助産学専攻科の設置、病院見学が始められ、教育プログラムの改革が進んでいる様子が伺えるなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

### 3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、講義、演習、実習・実験が組み合わせられ、特に医学科ではクリニカルスキルラボでのシュミレータ授業、模擬患者養成、クラークシップ臨床実習が採用されている。また、講義に無線LANの導入の他、少人数教育（プロブレム・ベースド・ラーニング（PBL）チュートリアル学習）の導入、フィールド型授業（全学共通教育、栄養学科、保健学科）、ティーチング・アシスタント（TA）活用（全

学共通教育、栄養学科)が工夫されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、少人数問題解決型学習(PBLチュートリアル)、e-learning利用可能なチュートリアル室の整備と夜間・休日開放、自学自習可能なスキルラボの整備運用、ウェブサイトによる少人数学習シナリオのブラッシュアップシステム、チューター制による学習困難者指導等学習を促す工夫がされているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果(判定)を変えようような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

#### 4. 学業の成果

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、チーム医療への対応、臨床技能の向上(スキルラボ、SP(模擬患者)活用)、自学自習の促進策とともに、3学科とも学業や諸活動を表彰する賞を設け、各賞とも毎年1～3名を賞している。その結果、休学者は0.9%と少なく、賞授与数は平成19年度総数で10名、国家資格試験の合格率は医学科88.0～98.0%、栄養学科90.4～98.2%、保健学科81.3～100%であるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、学生による授業評価、学生アンケート、学生との懇談会から教員へのフィードバックがなされるシステムである。その評価では、各学科とも約3割の学生が予習・復習の時間が不十分との意見もあるが、学生の75.8%(医学科)、78.8%(栄養学科)、65-76%(保健学科)が有意義な授業との評価をしているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

## 5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、医学科ではほとんどすべてが初期臨床研修へ進み、栄養学科では 1 / 3 が大学院博士前期課程へ進学、2 / 3 が病院、自治体、食品・製薬企業に栄養士、研究職・総合職として就職、保健学科では大学院への進学は数名以下でほとんどが看護師、診療放射線技師、臨床検査技師として病院（一部企業）へ就職しているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、医学科、栄養学科では就職先へのアンケート調査が、保健学科では聞き取り調査が行われており、前者 2 者ではいずれも 90%以上が「満足」・「非常に満足」との評価であり、後者では「良い評価」の概評を受けているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、医学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、医学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が3件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が5件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。